

アカツクシガモの越冬生態観察

常家傳 東北林業大学
于達敏 瀋陽市輝山風景区
劉英鐸 遼寧省北票農業区画事務所
訳 福井和二

摘要 冬期(11月中下旬から12月上旬)結氷したダムに、終日アカツクシガモの群れが氷の上に集まっており、採食行動は見たことがない。日暮れになると群れは氷の面を飛び去り、採食にでかけ、夜間には湖面にアカツクシガモの群れはいなくなる。群れがいた氷の面には足跡と糞が散在し、日がたつにしたがって、糞は堆積し、氷の中へ埋没していく。残されたダムの開水間で、冬の日中カモの群れが採食しており、夜間も氷の上に留まるカモ群もいる。この時期もアカツクシガモのつがい関係は依然として維持されている。

赤麻鴨、アカツクシガモ(*Tadorna ferruginea*) 俗に黄鴨^{キツナア}といい、我が国各地に広く分布している。越冬は東北地方南部から華北、長江、珠江流域にまで至る。国外での越冬はインドシナ半島、インド、日本、朝鮮半島およびアフリカ北部等である^[1-2]。

国内においてガンカモ類に関する文献は百数十編あるが、氷の上でねぐらをとるカモ類の報告はまだ見たことがない。1991年と1992年、筆者は遼寧省西部の北票市(41° 20' ~42° 30' N, 120° 16' ~121° 20' E)龍潭^{ロンタン}ダムと東山嘴^{ドンシャンズイ}ダムにおいて氷上で越冬するアカツクシガモを観察したため、以下のように報告する。

1. 越冬生息地および個体群の概況

1.1 ダムの概況；北票市には2つの中型ダムがある。東山嘴ダムは北票市南部巴図^{バドイン}営郷にあり、長さ1100m、最大幅600m、水面面積546,694m²、冬期の結氷期間11月下旬から3月下旬まで、しかし、1992年は初秋から降雨量が少なく、11月1日には全部が結氷した。ダムの周囲はほとんどが、平坦な耕地である。ダムに流れ込む河口附近では結氷が遅いが、しかし厳冬時にはすべて結氷し、その頃にはカモ類はこのダムを去っていく。春になって解氷が始まると続々とカモ類が渡ってくる。

龍潭ダムは北票市の西部にあり、北票では最大のダムで、南北約500m、東西最も幅広いところで約800m、水面の面積1,433,405m²、最大貯水量40,000,000m³で、年平均貯水量17,000,000m³である。水深がやや深く、他に比較して凍結が遅く12月20日ころには結氷し、春の解氷も4月初旬と遅い。ダムの東岸は平坦な耕地で、西岸は急坂な山地である。ダム上流の河口では100m²ほどの限られた水面は厳冬期でも結氷せず、これがアカツクシガモの越冬場所となっている。

ダム上流河口部には少量の植物が水面に突き出ているだけで、よい隠れ場所ではなく、したがってカモ類はここでは繁殖しない。

1.2 個体群構造；観察によると、両ダムとも春秋と冬にカモ群が出現しており、その最も多いのはアカツクシガモで、春より秋のほうが多い。秋季龍潭ダムで、アカツクシガモが最も多いときは700余羽(1992年11月11日)で、通常は200~370羽ほど、東山嘴ダムでは最大173羽(1991年11月28日)で、通常100羽くらいが滞在し、1年を通して11月がピークになる。春には龍潭ダムで100~300羽、東山嘴ダムでは20~40羽と少なく、春のピークは2~3月であ

る。5月以降、北票附近のダムでアカツクシガモを見ることはない。

冬期(12月初旬)北票附近のダムで少数のオオハクチョウ、マガモを見ることがある。

2. 越冬生態

2.1 行動習性；アカツクシガモは他のカモ類と比較して岸の上で行動することが多い(マガモなどは比較的岸に上がることは少ない)。彼らは岸辺の草地の中で枯れ草を採食していることが多い。水中では倒立して、後半身を露出しながら採食し、潜水することはない。地上で休息するときは頭を背中に乗せて腹ばいになるか、片足で立って休息し、水上では浮ながら頭を背中に乗せて休息する。またたえず羽繕いをしている。

1991年11月末東山嘴ダムでの観察(ダムはほとんど結氷)によれば、カモ群は終日氷上にとどまっていた。人が近づくとカモ群はゆっくりと遠くへ移動して、周囲を見回しながら警戒の鳴き声を発し、さらに人が近づくと(約100m)と飛び去ってしまい、人が去るとまた氷上に舞い降りる。カモが氷上に降りるとき、両脚で氷の面を50cmほど滑走して立ち止まる。この際氷面に摩擦痕が残っている。午後約6:30¹~17:00の間に、続々と小群で氷上を飛び去り、採食に出かける。夜間には氷上にカモは1羽もいなくなる。カモのいた氷上にはおびただしい糞が散在している。1991年11月28日6:10ころ、空がわずかに明け始めると、カモの鳴き声が出て、6:30ころからカモの群れ続々と飛来し、正午までに173羽となった。約1/3が腹ばいになり、残りは片脚で頭を背中に乗せて休息していた。12月2日4:30、氷上による観察、月明かりの氷上にはカモ類は見られず、6:00夜が明け始め、6:30ころ20羽ほどのアカツクシガモが河口附近の未だ結氷していない湖面の上空を旋回し始めた。この2回の観察によりカモ群は6:30ころ氷上に帰り始めることがわかった。カモ群は日中、岸から100m以上離れた氷上で、明らかに体を曝した状態で休息している。しかし、これが最も安全で、最も容易に外敵の接近を発見できるからである。人が近づくと、幾つかの個体が警戒の鳴き声を発し、全群が警戒体制になり、害敵の不意打ちに備える。

冬期のアカツクシガモの配偶関係はそのまま続いており、龍潭ダムでは一層明らかで、少数の例外を除いて、休息時、あるいは活動時でもほとんど雌雄が寄り添っていた。2月23日、4羽のアカツクシガモの盛んなディスプレイを行うのを観察し、3月18日には黒色の首輪が明かな雄(秋冬季は黒色の頸環は消失する)を観察した。

2.2 氷上の糞；1991年11月29日8:00氷上で観察した。カモ群がわれわれを警戒し、開水面へ飛び去った後に、排便されて間もない糞が散在しており、少数の糞に白色の尿酸が見られ、その他の大部分は緑色で、中には甚だ鮮明な緑色をした糞があった。これは結氷していない水底の水草を採食したものと思われる(この時期、周辺の陸地では全て枯れ草で、緑色の植物を見ることはない)。糞には、このほか黒褐色のものもあり、また、緑色と混合したものもある。日がたつにしたがって糞は暗黒色となり、日に曝されて氷の中に溶け込んでいく、糞の下は1~2cm、あるいはそれ以上沈下し、糞を埋没させ、表面が新しく凍結する。12月1日の観察では、11月29日に排出された糞が完全に氷面下に沈下し(2日経過)、糞の上がわずかに氷面に出ている。排便の時には噴射状を呈し、時には空中で排便し、小さな糞塊が4~5mも線状に散乱していることがある。

1992年11月26日から12月4日までに龍潭ダムで3羽のオオハクチョウが開水面で水草を採食しているのを観察した。彼らは開水面近くの氷上で休息していたが、枯れ草のある陸地で採食するのを見たことがない。当地ではハクチョウは陸上で採食しないと言われている。

1991年12月4日、龍潭ダムの朝7時にマガモ63羽を観察し、一部のマガモが水に浸かった

トウモロコシの茎を食べており、アカツクシガモと混群をつくっていた。

3. 討論

3.1 アカツクシガモの越冬時における採食行動はダム湖面に開水面がある時と全結氷時とははっきりと異なる。開水面がある時は採食条件はよく、日夜ダムから離れずに採食している。全結氷時には日中は氷上で休息し、日が暮れると遠方へ採食に出かけ、その採食場所は不明のままである。

3.2^{*2} カモ類が氷上で腹ばいになった氷面が突出している。カモの体で氷面を被ったため、氷が解け、さらに凍結することによるものと思われる、その頂点の氷面に足跡のついた窪みができている。なぜこのようになるのかは、さらなる研究が必要である。

訳注

*1 6:30は16:30の誤植であろう。

*2 この項については原文の文意が理解できず、昭和女子大の中国語講師に問い合わせたが、四川省育ちの彼女にも理解できず、そのままの訳文とした。